

第1回 女川町 炊出しボランティア レポート

(宮城県牡鹿郡 女川町立第1小学校にて)



頑張ろう日本！ 頑張ろう東北！

平成23年5月20日(金)

工藤 史大

第1回 女川町 炊出しボランティア レポート

このたびの東日本大震災により亡くなられた方のご冥福を心からお祈り申し上げるとともに、被災された皆様に対し心からお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

1. はじめに

未曾有の大災害を引き起こした、2011年3月11日の東日本大地震の発生から40日以上が経過しました。岩手県、宮城県、福島県、茨城県では、甚大な被害が発生し、未だに避難所生活を余儀なくされてる方々があります。この状況はライフラインの復興、仮設住宅への移住、自宅再建、他所への移住などが進むまで、まだまだ続くと思われまます。震災直後とは違い、だいぶ行政管理が行き届いてきましたが、避難所の方々へ支給される物資は限られています。今後何時まで続くかわからない中、慣れない避難所生活では、プライバシーもなくストレスも相当だと思われまます。義援金の寄付やトラックをチャーターしての物資支援は継続して行っていますが不十分だと思われまます。もっと出来ることはないかと考えた結果、直接現地へ赴き、炊出しによって温かい物を食べていただくことで、少しでも気が休まり、少しでも笑顔になってもらいたいという考えに至りました。

2. 女川町とは

女川町は宮城県の東に位置し、日本有数の漁港、女川漁港で知られた町。北上山地と太平洋が交わる風光明媚なりアス式海岸は天然の良港を形成し、金華山沖漁場が近いことから、地方卸売市場には暖流・寒流の豊富な魚種が数多く水揚げされていきました。町の南には石巻市とまたがって東北電力女川原子力発電所があり、東北地方に電力をもたらしていました。

3. 活動報告

今回現地入りしたのは、関東（東京、神奈川、埼玉）より9名と、東北（秋田、宮城）より6名の計15名。事前準備・当日の仕込みを担当したのは3名で、総勢18名のチーム。訪問したのは、宮城県牡鹿郡女川町の避難所「女川第一小学校」。事前に東北エリアの知人にヒアリングを行い、ボランティア団体などの炊き出しが少ない地区を選びました。この避難所には、約170名の被災者の方々が現在も避難所生活を送っています。小学校にほど近い女川漁港は津波に襲われ、今も瓦礫などが残っており、地盤沈下により漁港を含む町の一部は浸水状態。震災前はここで人々生活していたと思うと、言葉を失います。

以下、活動内容について報告します。

(1) 準備期間、炊き出しメニュー・支援物資

A. 準備期間：2011/4/16 ~ 2011/5/13 (約1ヶ月)

B. 炊き出しメニュー

豚汁うどん 200名分
浅漬け 200名分

C. 支援物資

歯ブラシ	400本	避難所より依頼品
洗濯用洗剤	400本	避難所より依頼品
子供用お菓子	50個	レクリエーション用
カレンダー	100本	仮設住宅用
干物	30匹	BC (ボランティアセンター) スタッフ用

(2) 活動レポート

2011年5月13日(金)

各自仕事を早めに切り上げ、21時30分から炊き出し道具一式、支援物資、熱い思いをトランクいっぱい詰めて、第一陣が22:00に出発。第二陣は遅れること約4時間後の25時に出発し、首都高速天現寺ICより一路宮城県へ。

2011年5月14日(土)

東北自動車道を300km走ったところで菅生PAにて給油と休憩を挟み、石巻市万石浦沿いで現地合流予定の東北組みと合流し、ひた走ること約6時間で目的地の女川町に無事到着。途中、福島県に入ったあたりから道路の凸凹、ひび割れや地震による速度規制が目立つようになり、宮城県の多賀城市に入ると今度は景色が劇的に変わります。仙台東部道路が津波を塞ぎ止めたこともあり、道路の海側は津波被害で泥に覆われた土地が地平線まで続いているような光景。反対外はほぼ無傷に近い状態。三陸自動車道の石巻港ICを降り石巻市街に入ると、道路の横に積まれた瓦礫の量も増え、窓を開けると潮や汚水のような臭いが鼻をつきました。海岸線へ近づくと、地震・津波の被害状況は酷くなり、想像以上の光景にただただ呆然とさせられました。そんな中、女川第一小学校に着くと、校庭にはきれいにコンクリート整備されたところに仮設住宅がところ狭しと設置され、校舎内もこれまでに届いた支援物資のテレビや自転車、生活用品があり少し安心しました。ライフラインもまだ整備されていないかと思ってましたが、第1小学校は女川町に入ってからすぐの高台に位置しているため、電気、ガス、水道も復旧しており、学校内のトイレも使用可能でした。

8時過ぎに女川町立第二小学校にあるボランティアセンターの須田さん(社会福祉法人 宮城県社会福祉協会 職員)に連絡し、学校の昇降口にて炊き出しの許可をいただき、運んできた物資、道具を搬入すると、早速豚汁、漬物の準備を開始。みんな張り切っていたこともあり、1時間もかからず調理が開始できる状態になりました。炊き出し準備と平行して、避難所の子供たちとの交流用に用意したレクリエーション実施(手作りルービックキューブもどき・知恵の輪、閃きクイズ問題)。集まったのは、小学4年生以下の子供約10名。はじめは緊張した面持ちの大人に警戒していた子供たちも、次第に心を開いてくれて、30分ほどすると学校の廊下に子供たちの笑い声が響き渡っていました。子供たちの笑顔は自然と周りの大人も明るくする不思議で大きな力があることを改めて実感させられます。豚汁うどん・漬物の準備が整うと、部活動のため離れた施設に移動する中学生たちへ、先に出来たてを配食してバスをお見送り。

12時近くから本格的に避難所のお年寄り、子供達に炊き出しを開始。女川第一小学校の避難者の方は、震災より2ヶ月の長きに渡り避難所生活をおくってきたこともあってか、炊き出し開始時に人が殺到することなく各自が時間を調整して、断続的に食事をとりにきていました。気温が高くなってきてたのでどうなるか不安でしたが、食べていただいた方からは「美味しかったです」「ありがとう」と声をかけていただき、元気をあげにいったのに逆に元気にさせられました。豚汁うどんが余っていると知るや、おかわりを取りに来る方も結構いました。意外だったのは、漬物の人気が想定していた以上だったこと。話を聞いてみると、避難所生活では、朝・昼に菓子パン、夜はおにぎりという食生活が続いていて、塩つけのあるものを食べるのが久しぶりだったそうです。子供用に持っていったお菓子もチョコなどの甘いものより、おっとつのような塩つけのあるものが先に無くなったことから頷けます。こうした話は現地にいかないと聞けないので、今後活動をしていく上では貴重なお話でした。

13時過ぎには一通り炊き出しを配り終わると、後片付けの傍ら、各々現地の方と会話したり、子供と外で思いっきり遊んだり、特別なことはせずに各自のできることをして被災者の方々と同じ時間を過ごしていました。

ボランティア活動は17時までと制限がある為、15時頃には片付けを完了し、現地で合流した東北組みとは次回までここでしばしのお別れ。第一小学校窓口の中島さんに挨拶をした後、関東組みも被災地の一日も早い復興と、震災前の生活に戻ることを祈りつつ避難所を後にしました。

この日に宿泊予定の秋保温泉郷へ向かう前に、避難所から1kmも離れていない女川漁港に赴き、被害状況を確認。そこはテレビで知る以上に現在もまだ凄惨な有様で、自衛隊が遺体捜索や瓦礫撤去を継続していました。昨日、政府は8月末までに避難所を原則解消し、国と地方が連携してがれき撤去にもめどを付けると発表しましたが、女川町で避難されている方は避難所の全避難者が移り住めるだけの仮設住宅を建てられる安全な場所が町にない現状の中、この先どうなるのか不安を隠せずに話されてました。今までの生活を取り戻すことさえも、計り知れない時間がかかるということを肌で感じました。各々さまざまなことを感じ、考えながら宿泊先のホテルに戻ると寝不足、疲労からか皆一様に深い眠りにつきました。

2011年5月15日(日)

早々に起床し、現地の雇用確保の一環として無理無い範囲でお土産や名産品を購入していざ帰路へ。高速道路では作業を終えた自衛隊とも数多く遭遇しました。皆さん一様に疲れきった表情をしており、このときばかりは自衛隊への労いと感謝の念を感じました。予想していた渋滞もほとんどなく、行きと同様に約6時間程で無事東京へ到着。片付け後、反省会をしたのち次回の活動に向けて思いを馳せながら帰宅の途へ。

以上、簡単ではありますが活動レポートとさせていただきます。

草の根的な活動ではありますが、少しでも早く東北地方が復興出来るよう微力ながら続けていこうと考えております。今回の活動に物資ご提供いただいた各社様、支援金を寄付いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。それとともに引き続きご支援ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

4. 活動成果

(1) 経験、実績を残したこと

現地へ赴く際の準備、ノウハウ、現地での一定の評価を残すことができた点

(2) 現地の状況を知れたこと

フェイスtoフェイスで被災経験談、被災状況を聞いたことで今後の活動における判断基準を持てた点

(3) ネットワークが持てたこと

ボランティアセンターの方々や面識を持てたことで、現地のリアルな情報を知る術ができた点

(4) 笑顔

被災者の方々、参加した方々が色々な意味で笑顔になれた点

5. 今後の展望

(1) 継続性

被災地にて感じたことは、一過性の支援ではなく継続した支援が絶対的に必要であるということ。その理由として一番大きいのは、初回の訪問では子供達ほど大人達は心を開いてはくれなかったと感じたこと。今後は炊出しや物資支援以外にも、コミュニケーションや現地情報が取れる時間をもっと増やしたい。今一度、活動の主旨や目的を次回打合せで再確認したうえで、行き先や支援の形・方法を見直し、長期スパンで継続していこうと思います。また参加者の多くが、平日の仕事や家庭を持つ環境のなかでの支援活動となるので、あまり無理のない1~2ヶ月に1度の頻度での活動を維持していきたい。

(2) 支援の輪の拡大

継続性を保つ為には、個人個人の負荷、負担を減らす必要があります。その為、少しずつ活動内容を今回参加協力していただいた皆さんの間でいい形で周知していただくことで、支援の輪が広まり、様々な形、様々な活動で被災地の皆さんのお役に立てればと考えています。

(3) 相互交流機会の創出

今後は現地に赴くだけでなく、東京やその他の地域にきていただくことも支援の一環になると思います。子供たちの部活動を支援する為に、ゆくゆくはこちらの学校やクラブと協力して交流試合のような機会を作ることもできればと考えています。

(4) 活動団体の名称

第1回の経験を元に、現地の災害対策本部、BC、支援物資提供メーカーなどとの打ち合わせや交渉の際、NPOやNGOと違いバックボーンを持たない団体として、かなり難航する場面が多々あった。今後ますます、現地でのボランティア受け入れに対し行政の規制が強まると思われるので、便宜上活動団体の名称を考えたい。草の根的に自由度の高い活動を主とするため、特定の企業や団体などには所属しない名称とする。

6. 課題

(1) 現地ニーズの把握

今回の活動の準備段階では、必要なもの、必要なこと、足りていること、足りないことといった現地のニーズを正確には掴みきれませんでした。被災者の方々にとっては、ささいなことが大きなストレスとなる可能性がある為、支援する側と支援される側とのギャップが出来る限り少なくする為には、今回の活動で築いたネットワークや、その他の手段にてしっかりと現地ニーズを知ることが必要なことだと考えられます。刻々と避難所や被災地域のフェーズが変わってきているので、ニーズにマッチングした支援をする為にも情報収集が1番の課題です。

(2) 避難所と仮設住宅間の隔壁

今回現地で最も感じたのが、避難所生活者と仮設住宅入居者との隔壁です。

仮設住宅に入居している方は、トイレ、冷蔵庫、洗濯機、エアコン、キッチンと一定の生活レベルが確保できている為、ボランティアや支援物資の供給は原則受けられないことになっています。

避難所生活者の大半（一部の高齢者を除く）は仮設住宅への入居を希望している為、羨望や妬みといった感情から自然と隔壁が生じているのが現実です。今後そうした環境の中でできること、個人レベルだからできることを色々な角度、観点から検討していく必要があると思います。

7. 補足事項

(1) 参加者 (敬称略)

工藤 史大 (東京)	井上 富喜 (秋田)	
石川 篤史 (東京)	武田 直樹 (宮城)	
石垣 健 (東京)	雨宮 正博 (宮城)	
水澤 秀之 (東京)	橋本 淳雄 (宮城)	
伊藤 和子 (神奈川)	高橋 勝士 (宮城)	
小澤 徹 (東京)	鈴木 謙児 (宮城)	
山田 尊政 (東京)	小澤 (父)	(事前準備・当日の仕込み)
加藤 聡 (埼玉)	小澤 (母)	(事前準備・当日の仕込み)
相原 朋子 (神奈川)	川端 陽子	(事前準備・当日の仕込み)

(2) 支援物資提供、支援金 (順不同)

- ・ シマダヤ株式会社 様
- ・ ニッサン石鹸株式会社 様
- ・ 田賀井 様 (歯科医)
- ・ GONE 様
- ・ 品川生活者ネットワーク 様
- ・ 大田区立八幡中学校 様
- ・ 中島水産 恵比寿三越店 様
- ・ 山田 様
- ・ 日本アイ・ビー・エム・ピズインテック株式会社 様
- ・ 石川 重美 様
- ・ 石川 敏子 様
- ・ 三浦 富美雄 様
- ・ 尚礼会町会 平野 様
- ・ 尚礼会町会 木田 様
- ・ 尚礼会町会 久保田 様
- ・ 株式会社同文社

(3) 行政支援

- ・ 災害派遣等従事車両証明書 (港区防災課より発行)

平成23年5月20日

東京都 港区 工藤史大